

独立行政法人地域医療機能推進機構(JCHO) 熊本総合病院(熊本県八代市)

「医療とともに、公に一肌脱ぐ」ことで 100年後の住民が誇れるレガシーを遺す ～病院を核としたストック型まちづくりの実践～



JCHO 熊本総合病院 病院長
島田 信也

熊本県八代市の中心市街地に立地する独立行政法人地域医療機能推進機構(JCHO)熊本総合病院。2013年に新病院を竣工、高度急性期医療の提供を通じて地域のまちづくりに貢献するという、独自の運営方針を貫いてきた。今回は同院を訪ね、病院長の島田信也先生に新病院建設に至る背景とともに、日本の地方都市創生モデル「病院を核としたストック型まちづくり」の概要をご説明いただいた。さらに同院の診療部、薬剤部、看護部、それぞれの取り組みについて、3人の先生方にお話をうかがった。



(JCHO 熊本総合病院提供)

病院の再生がまちの再生につながる ～医療がまちづくりを担う時代に～

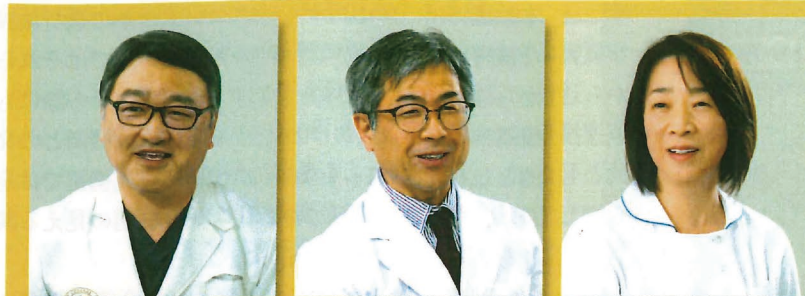
熊本県南部にある八代市は、いぐさ、トマト、メロンなどの生産が盛んで、かつ八代臨海工業地域には石油化学コンビナートや製紙工場などが集まる田園工業都市である。観光地としては、八代城跡、松浜軒などの名所旧跡、日奈久温泉、溪谷が美しい五家荘などが知られる。熊本城の見事な石垣を組む技術を源流とする肥後の石工(種山石工)の故郷も同市東陽町(旧種山村)にある。こうした豊かな自然と歴史・文化をもつ八代市だが、人口は約12万7千人で、近年は減少傾向にある。

島田先生が病院長として同院(当時は健康保険八代総合病院)に赴任したのは2006年10月だった。2004年度から始まった新医師臨床研修制度により、医師の引き上げが相次ぎ、同院は100床を閉鎖、累積赤字約7億円という危機的状況に陥っていた。ところが、島田病院長ほか全職員が一丸となって業務改善に取り組んだ結果、2007年度に収支は黒字化した。さらに2008年度は累積赤字も解消し、

奇跡的なV字回復を果たした。

当時を島田病院長はこう振り返ってくれた。

「この病院に赴任したとき、私には病院とまちがまるで廃墟のように感じられました。シャッター街は人通りも疎らで、その閉塞感たるやすごいものでした。私は八代市の出身です。これではいけないと思い、病院の全職員一人ひとりと面談し、『公のために一肌脱ぐような病院を目指そうじゃないか』と協力を呼びかけました。この言葉は今も当院の信念として掲げています。その頃の医師は25人で、内科と外科しか稼働しておらず、私はまず医師を派遣してもらおうと熊本大学に何度も足を運びました。しばらくは出たり入ったりの時期が続きましたが、整形外科に3人の医師を招聘できたときに流れが変わりました。その後も医師数は順調に増え、現在は70人に達しています。地元の開業医のみなさんには『責任もってお返しますので、患者さんをぜひ紹介してください』とお願いして歩きました。140か所以上を訪問しました。赴任後1年が経ち病院の経営が軌道に乗ってくると、嬉しいことがありました。近隣の閉鎖中だったスーパーマーケットが2店舗、営



JCHO 熊本総合病院
副院長
古賀 一成

JCHO 熊本総合病院
薬剤部長
藤井 憲一郎

JCHO 熊本総合病院
看護部長
瀬高 香澄

業を再開したのです。病院がまちの基盤になるものだと確信できました。医療の経済波及効果は、公共事業よりも高いとされています¹⁾。今や医療がまちづくりを担う時代であり、医療を通じてまちづくりをする。私はこれこそが地方創生だと考えるようになりました」

100年後にレガシーを遺す「ストック型社会」 ～新病院を八代市のランドマークに～

島田病院長は新病院の建設が八代市の新たなまちづくりに貢献できると考えた。

旧病院は老朽化が進み、質の高い医療の提供には程遠い環境にあった。幸いにも2008年に旧病院と道路を隔てて斜め向かいにあった学校が移転し、新病院建設用地を取得できた。しかし2009年末の社会保険庁の解体で、一時期計画は棚上げになってしまった。島田病院長はその2年間を新病院のデザイン・設計の時間に当てることにした。

2011年に社会保険病院群のJCHOへの改組が決まったことで、ようやく厚生労働省から新築事業の認可が下り、念願の新病院建設がスタートした。2013年1月に新病院が完成、同時に名称も「熊本総合病院」に改められた。新病院の外壁はすべて自然石が使われており、院内外の設備には様々な工夫が凝らされた(図1)。

その建物は、九州自動車道・八代インターチェンジを下りるとすぐ目に入ってくる。

実は島田病院長が理想とするまちは、30代半ばに留学で4年間暮らした米国のワシントンD.C.だった。

「ワシントンD.C.のまちは素晴らしいですよ。空港に降り立ち、車に乗るとまず森の中を抜けて行きます。右手にはポトマック川が流れていて、橋を渡るともうダウンタウン。視界が開けて国会議事堂がパッと目に入ってきます。こうしたシチュエー

ションを考えたまちづくりに私は感動しました。そして、ワシントンD.C.には石造りの堅牢で美しい建物がいくつもあります。住民も親切で、自分たちのまちに誇りをもっている。私は八代市のまちをミニ・ワシントンにしたいと思ったのです。ワシントンD.C.のランドマークはワシントン記念塔ですが、同じように私たちの新病院を八代市のランドマークにしたいと思い、設計段階から参画しました。新病院ができるとアーケード街にも人通りが戻り、周辺にはホテルや高齢者向けマンションの建築も相次ぎました」

戦後の日本社会は全国各地で、古いものを壊し、絶えず新しさを追求するスクラップ・アンド・ビルドのまちづくりが行われてきた。このような「フロー型社会」では、住民がまちに誇りや愛着をもつことは難しいと島田病院長は考える。歴史や文化が培われることもなく、人口流出は避けられない。一方、価値のある建物を少しずつ創り、住民が誇りをもてる建造物が増えていけば、そのまちには人は留



歩きたくなる歩道
(病院の外壁はすべて自然石)

雨に濡れない玄関前のプロムナード
(夜間はライトアップされる)

1階 エントランスホール
(壁面はマホガニー、床は大理石)



2階 外来ロビー

6階 病室(特別室A)

6階 空中庭園「木漏れ日の散歩道」

図1 JCHO 熊本総合病院の風景 (JCHO 熊本総合病院提供)